

【意見提出用紙】

内ヶ谷ダム建設事業の検証に係る意見	
ふりがな 氏 名	いまもと ひろたけ 今本 博健
企業名又は所属団体名	なし
部署名（担当者名）	なし
住所又は所在地	
電話番号 FAX番号	
電子メールアドレス	
ご 意 見	<p>定量治水から非定量治水への転換をはかろう</p> <p>■なぜ、前提である「ダム事業そのものへの点検」をしないのか</p> <p>岐阜県の内ヶ谷ダム建設事業の検証が国土交通省河川局による平成22年9月28日付けの「ダム事業の検証に係る検討に関する再評価実施要領細目」にしたがって進められている。この検証の発端は平成20年8月の「コンクリートから人へ」をmanifestoに掲げた民主党への政権交代であり、「できるだけダムにたよらない治水」への政策転換を進めるためのものである。</p> <p>この「再評価実施要領細目」には「検証に係る検討の手順としては、必要に応じて対象とするダム事業等の点検を行い、これを踏まえて、各ダム事業について目的別に検討を行う」とされており、「必要に応じて」との条件付きながら、「目的別に点検を行う」まえに「ダム事業等の点検を行う」ことが求められている。しかし、内ヶ谷ダム建設事業の検証ではそれがなされていない。</p> <p>いまの治水は、一定限度の規模の洪水(基本高水)を対象とし、河道と洪水調節ダムに配分するのを基本方針としている。この方針に基づけば、基本高水が河道の流下能力を上回る場合、ダムを採用せざるを得ないことになるが、それをもって「内ヶ谷ダム建設事業の点検は不必要」と判断したとすれば、余りにも安易である。</p>

「ダムによらない治水」は、政権交代に伴う政策転換は単なるきっかけを与えただけであり、背景には、人口減少、少子高齢化、財政赤字という社会情勢や、治水機能が限定的で不確実である、地域社会を崩壊させる、自然環境を破壊する、数十年から数百年後には土砂で埋まり役に立たなくなる、ダムの適地がほとんど残されていないというダム自体の問題があり、歴史的な必然である。

このようにダムが多くの問題を抱えていることからすれば、内ヶ谷ダムの検証においてダムを建設することの適切性についての点検を怠ったことは重大な瑕疵であり、「いかなる洪水に対しても住民の生命と財産を守る」という治水の使命の見地から改めて点検すべきである。

■「目的別の検討」にも問題がある

内ヶ谷ダム建設事業の検証における「目的別の検討」も、国土交通省河川局が示した「再評価実施要領細目」にしたがって、たとえば治水については26種の対策案(ダム、遊水池、雨水貯留・浸透施設、霞堤等)を7種の評価軸(コスト、実現性、環境への影響等)のもとで検討しようとしている。

ここで対象とされるのは一定限度の洪水のみであり、対象を超える洪水は想定外である。しかし、このたびの東日本大震災をもちだすまでもなく、想定外の降雨に対して住民の生命を守ろうとしないのは治水の名に値しない。

環境への影響についても、安易に影響を低く評価し、重大な環境破壊を見逃してきたこれまでの事前評価への反省がなく、評価法あるいは評価者の改善への意欲が認められない。

コストに至っては、ダムを残事業費で比較するなど、ダムへの優遇が顕著であり、本体着工後の設計変更、環境修復、排砂などの不安定費用に触れていない。

平成23年4月に行われた「内ヶ谷ダム建設事業の検証に係る意見募集に伴う説明会」の資料によれば、完成予定が平成39年とされている。普通、4～5年で完了する本体工事が16年後とされるのが財政上の問題によるとすればさらに遅れる可能性が大きい。この間の住民の安全をどのようにして守ろうというのか。「当面実施しない」として「必要に応じて見直す」とするべきではないか。

■非定量治水への転換が望まれる

いまの治水は一定限度の規模の洪水を対象にすることから「定量治水」といわれ、対象を超える規模の洪水に対しては超過洪水対策により対応しようとしているが、現実にはほとんど実施されていないため、超過洪水に耐えられないという欠陥は解消されていない。また過大な対象洪水を設定することによって対策が硬直化し、その完成が困難になっている。

これに対して、対象洪水を設定せず、実施可能な対策を順次積み重ねるのが「非定量治水」であり、洪水を溢れさせない対策と溢れた場合の対策を同時並行的に実施することにより、壊滅的被害を回避しようとしている。

両者の安全度を比較すると、定量治水では対策が完成する長時間後に飛躍的に増大するが、非定量治水では短時間ごとに少しずつ増大することになる。いずれが優位かは場合によって異なるが、壊滅的被害を回避するという面では非定量治水が優位である。

国土交通省河川局は定量治水に固執し、いまだ改めようとなさない。しかし、いままさに転換期である。岐阜県におかれては、豊かな長良川を次世代に引き継ぐためにも、率先して非定量治水への転換をはかれることを望んで止まない。